

火星



七曜抄

山尾玉藻

膝掛けの大き桜の主かな

蛸の脚いつぽん買ひし花の冷

花屑ののりしサドルの形なり

海雲啜りて泊る気になつてきし

黒竹のひと揺れに生る春蚊かな

うしろより押され寝釈迦の前にあり

掛布団ずれておはせし寝釈迦かな

春の水叩いて母をふりむかす

むらさきの袈裟に呼ばれし孕鹿

葉桜は目深き礼いちゃをするところ

火星作品

山尾玉藻選

捨てやうと木椅子拭きゐる春の雪
箕面 浜口高子
行くほどに余呉の春の灯退りけり

北陸本線都踊の話かな

花どきの湾処の泡動きたり

この下_{しも}の三里先なる雛流し

桃の日の昼の炬燵に父がゐて
大和郡山 城 孝子

ひな流すまでのひいなに湿りあり

混みおうてゐて隙間あり雛の舟

花の種蒔きたる顔の古びけり

両肩で夜のさくらを見てゐたり

春眠し遠く近くを水流れ
明石 戸栗末廣

出棺や剪定の音風にあり

本降りとなりしづかなる末黒葦

啓蟄の赤子にしるき片糸くぼ
あけつぴろげに蕊見せしチューリップ
音させて蛤ふたつづつ洗ふ
顎のせて新教科書を運びくる
雲水が手を洗ひぬる花の昼
雛壇の箆笥ひらいてありにけり
花の夜の橋渡るとき生ぐさし
裏山は風のなき山ふきのたう
桃の花深くお辞儀を返しけり
羽衣橋渡つてすぐの種物屋
固まつてゐてひとりづつ磯遊
鶴の舞はじめに頸を伸ばしけり
結晶のなほ尖りけり春の雪
浅春の突き当りなる余呉湖かな
白鳥を男見てぬし座りけり
八万やちまうの雪消溢るる淡海かな
啓蟄やいよよに黒き観世音

神戸 深澤 鱻

宝塚 杉浦典子

西宮 米澤光子

選のあとに

山尾 玉藻

行くほどに余呉の春の灯退りけり 浜口 高子

掲句が句会に出された時は迷うことなく特選に頂いた。と言うのも高子さんと前後して二月の末に私も余呉を訪れていたからである。今年は雪の量が例年に比べ少なかったが、それでも二月の余呉はまだまだ冬の景であった。「春の灯退りけり」に共通体験による共感を得たのである。ところが選後評を書く段になって、「春の灯」という季語にやや違和感が感じられた。「春灯」の季語の本意である艶で温かな季語感と少し違うように思えたからである。勿論「冬灯」では即き過ぎで駄目だが、二月の灯も春灯と言える真実に却ってバランスを失ったのかも知れない。そう思いながらも私は未だ「春の灯」の是非には迷っている。一年後にははつきりするであろう。同時発表の〈捨てやうと木椅子拭きあふる春の雪〉〈花どきの湾処の泡動きたり〉も佳句であった。

桃の日の昼の炬燵に父がゐて 城 孝子

散文的であるがこの句の場合、「桃の日や」と明確に切らない方が良い。「父」とだけ言っているが、既に年老いた父であ

ることが理解できる。周りの華やかさに対する孤独がある。

あけつひろげに蕊見せしチューリップ 戸栗 末廣

「あけつひろげ」の措辞にやや厭らしいエロスがある。ゆるびかけたチューリップに「蕊」だけがシャンと正しく残っているのである。チューリップの本意をついた俳諧の句。

顎のせて新教科書を運びくる 米澤 光子

よくもまあ思い出された、と共感出来る景である。「顎のせて」に実景としての強みがある。「新教科書」と言う季語は比較的珍しいが充分納得できる。

白鳥を男見てゐし座りけり 深澤 鱧

湖北同行の折の句である。帰り支度の白鳥が何百羽と集まっている景に出会えた。掲句はその辺のことを全て切り捨て、男の動作だけに絞った。当然「男」で成功した作である。

野遊びや夫を誘ひし悔い少し 大山 文子

「野遊び」と言っても弁当まで持つて出た訳ではなく、散歩がてらに出かけたのかも知れない。文子さんが土筆や蓬などを摘み始め興に乗ってきた頃、ご主人の方は帰りがられたのだろうか。「悔い少し」とはその程度のこと。

落味噺やごつごつ当る夫と居て 高橋 芳子

「ごつごつ当る夫」に年輪を重ねてきた夫婦であることがうかがえる。的を得た表現で俳味充分。但し「落味噺」はやや古い。もう少し新しい季語がありそうである。

風船をふたつ付けたる三輪車 波田美智子

なんでも無い句だがこれも実景の強みであろう。嬉々として乗っている幼子の様子が目に見える。

やまももが仰山生るといふ日永 元田 千重

不思議な句である。「日永」が特別な時節であろう筈がなく、「やまももが仰山生る」と言う因果も無く、この人を使ったような捉え方が面白いのである。「やまもも」と「日永」に良き関係があるからであろう。

盆梅展大つくばひの雨が見え 高松由利子

由利子さんとは偶然長浜の盆梅展で一緒になった。慶雲閣と言う由緒ある館が会場であったが、「大つくばひ」にその感じがよく出ている。「盆梅展」そのものから少し外した所を詠んで成功している。

粥ばかり口が欲しがる夕桜 堀 義志郎

義志郎さんも体調を崩されて自宅で療養中と聞いている。体力の衰えが「粥ばかり口が欲しがる」によく表れている。「夕桜」も哀しく美しい。一日も早いご快癒をお祈りしています。

家族会議終りし頃の恋の猫 大久保廣子

「家族会議」と言えばやはり深刻な話であろう。結論が出たのか出なかつたのか、一応その日は終りとしたのである。それまでは聞こえなかつた「恋の猫」の聲が忽ち聞えてきたのだ。人間生活と関わりが無いこの落差、大いに俳諧がある。

帽子飛ば桜吹雪の中を飛ば 渡辺 繁

桜の頃思わぬ突風が吹くことがある。あの「桜吹雪」の美しさに比べ「帽子」が飛ばされるのは無様である。「桜吹雪」の高さと「帽子」の低さは、自然界に対する人間界を見るようである。

初蝶の登りて行きし滑り台 大石 芳三

「登りて行きし」は勿論這って行くのではなく、舞いながら滑り台に沿って行ったと言うこと。蝶でなく「初蝶」が動かないのは、この「登りて行きし」の措辞にあるのだろう。

玉藻俳句鑑賞

墓三つ葉の花を揺らしたる 玉藻

〔火星〕平成十四年七月号より

食用にする菜はどれもやさしい花を咲かす。「すべて菜の花と称す」と江戸中期の季寄せにある。狭義には油菜の花のこと。墓の動きを直接言わず、三つ葉の花の揺れたことに焦点を当てている。〈墓誰かものいへ声かぎり 楸邸〉〈墓歩く到りつく辺のある如く 汀女〉など男女限らず墓の句は多い。玉藻先生もまたよく詠まれる。

(典子)



恒星巻

田中英子

春雷の盗んでゆきし媼かな
焼山のまんべんなくといふがあり
墓穴を出て何植うるあてのなし
盃に金粉残る花の冷
ちちははに花大根の殖えにけり

大東由美子

田中吞舟

花桃の齒医者予約たのまれて
さくら餅去年の話しよつぱくて
菜の花にゆるゆる止まる車かな
黄水仙白波岩を呑み込める
春眠のきりりと一本アイシャドー

宝石の如き春雨軒しづく
散る桜ひざに溜めおく車椅子
春競ふ源平梅や二条城
藤房の下で昼寝のホームレス
車椅子の囲みししだれ桜かな

高尾豊子

田中みのる

春泥の蹄トトロの森にをり
いろいろのハーブをくべて牧開き
春風や荒湯に夫の攫はれし
夢千代のつぼ湯に垂らす春愁
膨みし飛行機雲や青き踏む

夢千代の海に生れ初む螢烏賊
螢いか貝殻節を宿に聴く
風光るドック・ヤードのクレインかな
鮎子売る囃子詞の句会まで
行き摩りの僧が鮎子買ひにけり

獅子座

山尾玉藻推薦

山田美恵子

蛇の空秀吉の幕張られたる
ふきのたう蘭けてゐるなり軍鶏の籠
春帽子いざ遊ばむと夫の買ふ
目瞑りて水飲みし猫花曇

西畑敦子

巻き舌に麒麟水吸ふ春うらら
岩肌に水かげろうや木の芽張る
四阿の膨らみぬたる花の昼
芽山椒ふはり包まれ届きけり

高松由利子

八荒の懐にあり夜這酒
足型のでこぼこ光る磯遊び
ねこやなぎ余呉に合戦場の絵図
涅槃図の一巻ほどく広間かな

丸山照子

騎馬隊の音にほぐれし柳かな
桃の花子の荷にありし「バカの壁」
武蔵野の芹を摘みつつゆく見舞
海苔巻の海苔かぐはしき花の下

築田たかゑ

縁側にはらから寄るや梅日和
巢造りの下手な番に日永かな
プランターの土乾きゐる葱坊主
蒔草の花のもじやもじや雲低し

助口弘子

春の雪遺跡の穴の大きかり
春の昼うつらうつらに子の育つ
納骨の穴の明るき花の昼
種物屋の大看板の下通る

松井倫子

永き日の河原に鞍点在す
料峭やホテルの廊の七曲り
ビー玉の弾けし音や花薺
大木の古巢に透けし青き空